

# The 74th Annual Meeting of the Chubu Division of Japanese Association of Anatomists

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/40226">http://hdl.handle.net/2297/40226</a>

## 『学会開催報告』

「日本解剖学会  
第74回中部支部学術集会」  
The 74<sup>th</sup> Annual Meeting of the Chubu  
Division of Japanese Association of  
Anatomists

金沢大学医薬保健研究域医学系組織発達構築学  
(解剖学第一)

井 関 尚 一

10月11日(土)午後から12日(日)午前にかけて、医学類G棟第3講義室を利用して井関尚一会長、尾崎紀之副会長、堀修副会長のもと、日本解剖学会第74回中部支部学術集会(中部地方会)を開催しました。日本解剖学会は120年以上の伝統を持つ学会であり、全国で約2500名の会員を擁しています。全国学術集会を年1回行なうほか、各地方支部の学術集会を年1回行ないます。約350名の会員を擁する中部支部の学術集会は、9県にある16校の医学部・歯学部を有する大学が持ち回りで毎年開催してすでに70年以上になります。16年ぶりの金沢での開催となる当日は天気にも恵まれ、86名の参加を得て、土曜日に19題、日曜日に13題の計32題の口演発表がありました。土曜日夜には附属病院のレストラン済美にて73名という多数の参加により懇親会が行なわれました。

解剖学会の特徴は、肉眼解剖学、神経解剖学、組織学、細胞生物学、分子生物学、発生学から人類学まで非常に多彩な領域を包括しながら、それぞれを専門とする研究者が、医学部や歯学部を中心とする解剖学教育に携わるという共通の基盤のもとに連帯感をもっていることです。特に中部地方会は、1泊2日で行なわれ、多数の会員が参加して活発な討論を行なうとともに親睦を深めるという良き伝統を持っています。昨今、全国的には解剖学講座の数が減らされたり他分野の講座に衣替えしたりなど、厳しい状況もありますが、医学の最も基本となるものが解剖学であり、構造と機能、分子と生体、また分析と総合との間を橋渡しし、生命原理の直感的理解を可能とする形態学の重要性は、今後とも増しこそすれ減ることはありません。今回も新たな若い研究者による発表が多数行なわれ、学会の未来は明るいという印象を持ちました。

最近の全国規模での学会では、口演はシンポジウムのみでテーマごとに多数の会場で行なわれ、一般演題はすべてポスター掲示という形式が多くなりました。参加者は自分の専門に近いシンポジウムだけを聞くために会場を移動し、ときにはテーマが重なって聞けない演題もあり、またポスター会場でも興味のある掲示以外は素通りということも多く、全体として時間と体

力を費やす割には充実感が少ないという印象があります。今回のような1会場での口演のみによる学会では、参加者は席に座ったままで次々に行なわれる発表を聞いているだけで済みます。全国集会では聞かないような専門外の領域の話でも、いやおうなく聞いていると面白いものばかりであり、至福の時を過ごすという言い方も誇張ではありません。さらに発表者にとっても、口頭発表というのは自分がその時間の主役になることですから、ポスターでは得られない充実感があります。特に大学院生など若い研究者にとっては、口頭発表を行なう貴重な訓練の場となります。今回は最近の口演の傾向にならって1演題あたり発表8分、討論4分の計12分とし、進行は座長に任せてペルは鳴らさないことにしましたが、どの演題にも必ず複数の質問が出て活発な討論が行なわれたので、この方法が最善であると思いました。総じて、1会場での口演というのはまさに学会の原点であるという感を深くしました。

今回の中部地方会では、解剖系の3つの講座の教員、大学院生、留学生、学類学生、技官、秘書の皆さんすべての協力をいただき、事前の準備から当日の受付、会場での進行、データの映写、コーヒブレイクや懇親会の世話まで、すべての役割を一条乱れず遂行していただきました。ここに深く感謝いたします。

